

IV. 武士の世の中 (今から420年～160年前)

江戸幕府ばくふが成立すると、政治の中心は完全に武士のものとなります。全国は大名の支配する藩はんに分けられ、東紀州全域は和歌山の徳川家の領地りょうちとされます。新宮城には紀州藩付家老つけがろうの水野氏が入り、東紀州のかなりの部分を支配します。

熊野は、木本こうのうえ・神上こうのうえ（神川町）・西山（紀和町）など、直接紀州徳川家の支配しはいを受ける地域（和歌山本藩領ほんばんりょう）と、井戸・有馬・入鹿（紀和町）のように新宮の水野家の支配を受ける地域（新宮水野家領）に分かれます。

木本には奥熊野代官所が置かれ、この地方の中心地として大きく発展します。家々と通路を整理する「町割り」が行われ、今日のような姿になるとともに、不自由であった飲料水の確保も人々の努力によって可能になります。

平安時代から続いていた「熊野詣くまのもうで」はこの頃再びさかんととなり、これまでの紀伊路きいじに加え、伊勢神宮から南下する伊勢路いせじの利用が多くなり、けわしい山道を一列になって熊野をめざす巡礼じゆんれいの列は「蟻ありの熊野詣」といわれました。紀州藩は街道の整備に力を入れたため、美しい石畳いしたみの道が各所に現在まで残り、これらは2004年（平成16年）に「世界遺産いさん」に登録されました。

また、この時代には全国で農業生産が大きく伸びますが、熊野では台風たいふうの時期、海からの海水なやの浸入しんにに悩まされ、百姓たちの水との戦いたたかが続き、多くの犠牲ぎせいを出しました。

やがて「黒船来航くろふねらいこう」をきっかけとして、世の中は大きく動くこととなります。紀州藩でも沿岸の守りを固め、各地とみばんしょに遠見番所を整備しますが、そんなさなかに、熊野では「村替騒動むらがえそうどう」が起ります。

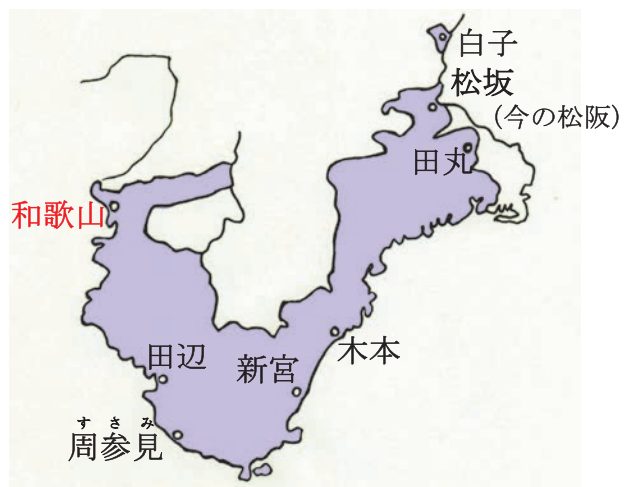
- * 付家老 …徳川御三家つに付けられた藩主はんしゅのもり役のこと。
- * 遠見番所…外国船を見張る役所。

りょうち 紀州藩の領地

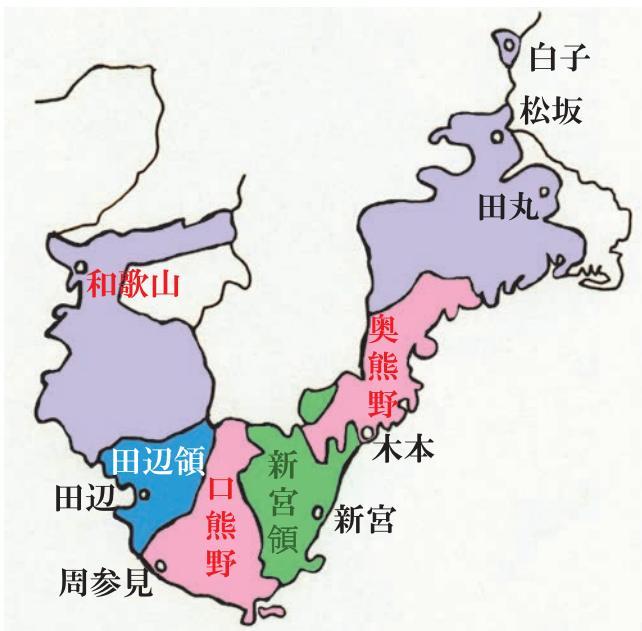
紀州藩は、どのくらいの広さがあったのでしょうか。

「紀伊国」や「紀州藩」といった名前から、多くの方は「現在の和歌山県の全ての地域と、三重県側は南牟婁郡紀宝町、御浜町、熊野市、尾鷲市、北牟婁郡紀北町」と答えるでしょう。しかし、実際は、それよりもっと広い範囲にわたりました。和歌山県側をみると、高野山領を除いた地域が紀州藩に属しました。三重県側は、先にあげた紀宝町、御浜町、熊野市、尾鷲市、紀北町、そして伊勢国の松坂（松阪市）、田丸（度会郡玉城町）、加えて飛び地の白子（鈴鹿市白子）も紀州藩の領地でした。昔の資料を見ると、この他に「大和領」というのもありました。

この広い紀州藩の領地は、いくつかに分けられ、その領地を与えられた者が、その地の政治や経済政策を任せられました。和歌山本藩領は紀州徳川家、田辺領は紀州徳川家の「もり役」である付家老の安藤家、新宮領はもう一人の付家老の水野家、田丸領は久野家がそれぞれ支配し、明治の初めまで続きました。



(紀州藩 伊勢国の一部と白子の飛び地)



(口熊野と奥熊野) 和歌山に近い方が“口”
(P52 “口”と“奥”、P96 “廢藩置県”を読もう！)



(紀伊国)

紀伊国の範囲と紀州藩の範囲は違います

「口」と「奥」

口熊野と奥熊野 口有馬と奥有馬

口熊野と奥熊野の地名は、紀州藩の政治の中心、紀州藩の殿様がいる和歌山城からみて近い所が「口」熊野（中心地 周参見）で、遠い所が「奥」熊野（中心地 木本）と呼ばれました。

熊野市内の中心は、江戸時代になるまでは「有馬」でした。だからこそ、この地方の豪族・榎本氏は中心地の地名「有馬」氏を名乗り、有馬に城を構え、支配していたのでした。熊野市内で「口」や「奥」の文字の付く地名は、口有馬と奥有馬があります。どこを基準にして「口」と「奥」の地名を付けたのでしょうか。政治の中心地である有馬本城は、奥有馬に位置します。ここを口有馬としなかったのはなぜなのでしょう。

有馬は、慶長の頃（1596年～1615年）は池辺村と言っていましたが、後に有馬村となり、さらに口有馬村、奥有馬村、山崎村の3つの村に分かれていました。

「上」と「下」 「上り」と「下り」

政治の中心地 首都東京が基準の地となります。東京に近づくのが「上り」で、東京から遠ざかるのが「下り」です。だから、東京に行くことを「上京」と言います。しかし、江戸時代は京・大坂（今の京都・大阪）が上方と言われ、下の方にある江戸（今の東京）に行くことは、当時は「下る」と言っていました。昔、京（京都）に行くことを「上洛」と言いました。味噌、醤油、米、酒、油、塩、ろうそく、傘といった高級なものが上方から江戸に運ばれました。江戸の人たちは、上方から運ばれてきたそれらの高級品を「下りもの」と呼びました。下りものでない普通のものは、下ってきたものではないことから、「下らないもの」と言うようになりました。

「上と下」、 「近と遠」、 「前・中・後」

「上と下」、「近や遠」、「前・中・後」といった文字の付く昔の国名は、奈良の都（大和国）が基準の地として付けられています。昔の国名をみてみましょう。

「上と下」

奈良の都に近い方が「上」です。

上野国（群馬県）と下野国（栃木県）

上総国（千葉県）と下総国（千葉県・茨城県）

「近と遠」

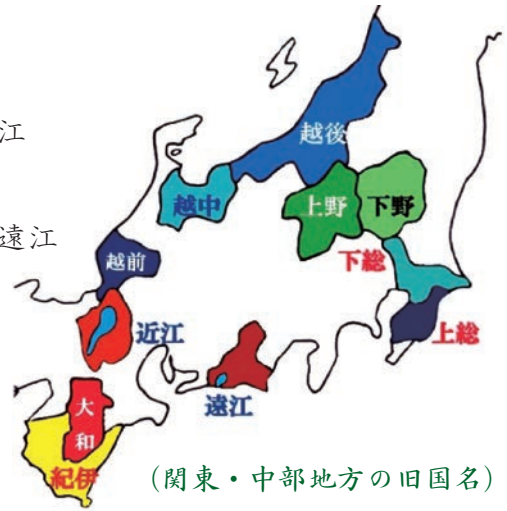
奈良の都に近い方が「近」の文字が付いています。

おうみのくに
近江国（滋賀県）

奈良の都に近い所に大きな湖琵琶湖があるから近江

とおとうみのくに
遠江国（静岡県）

奈良の都より遠い所に大きな湖浜名湖があるから遠江



（関東・中部地方の旧国名）

「前・中・後」

奈良の都に近い方が「前」の文字が付いています。

えちぜんのに 越前国（福井県）、えちちゅうのに 越中国（富山県）、えちごのに 越後国（新潟県）

うぜんのに 羽前国（山形県）、うごのに 羽後国（秋田県）

りくぜんのに 陸前国（宮城県・岩手県）、りくちゅうのに 陸中国（岩手県）、むつのに 陸奥国（青森県）

* 陸奥は「陸の奥」ということで「みちのく」という言い方もされます。

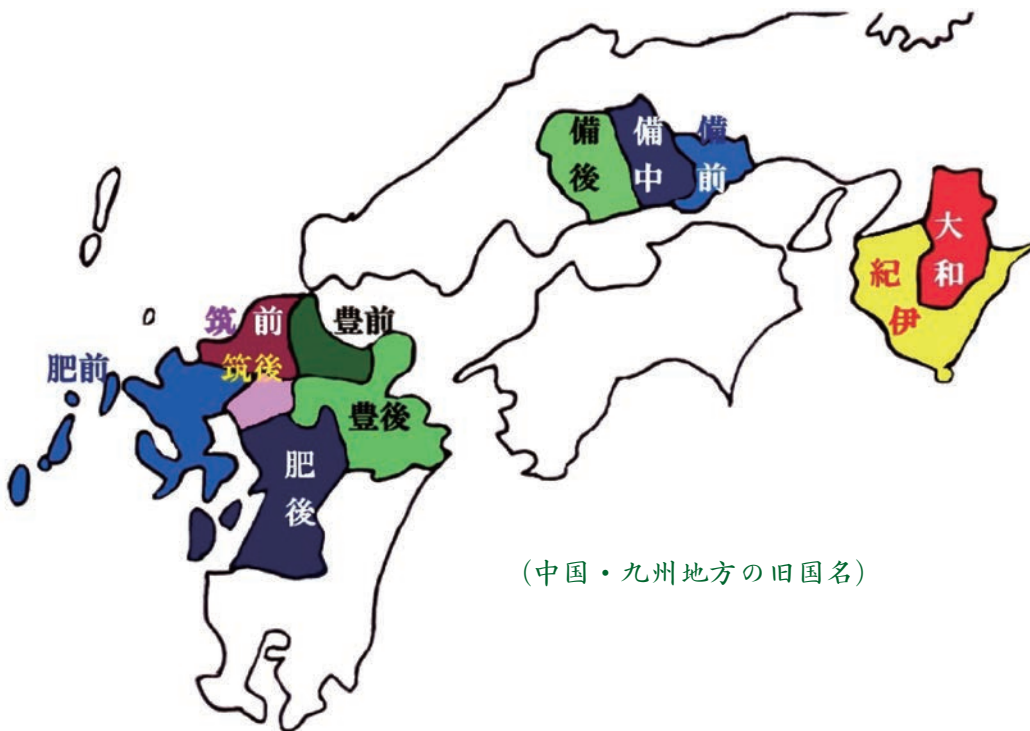
西日本、九州を見てみましょう。ここも奈良の都に近い方に「前」の文字が付いています。

びぜんのに 備前国（岡山県）、びちゅうのに 備中国（岡山県・広島県）、びんごのに 備後国（広島県）

ちくぜんのに 筑前国（福岡県）、ちくごのに 筑後国（福岡県）

ぶぜんのに 豊前国（福岡県・大分県）、ぶんごのに 豊後国（大分県）

ひぜんのに 肥前国（佐賀県・長崎県）、ひごのに 肥後国（熊本県）



（中国・九州地方の旧国名）

とのおさま 静岡から来た三人の殿様

よりのぶ しげなか 徳川頼宣 と 水野重仲

とよとみひでよし かつやく
豊臣秀吉が活躍していた頃、この熊野地方をほりうちうじよし おさ
堀内氏善が治めていました。しかし、1600
年（慶長5年）の天下分け目の関ヶ原の合戦で、徳川家康（東軍）とは反対の石田三成（西
軍）の方に味方し、戦いに敗れてしまいました。敗れた堀内氏善は熊本に逃れました。替
わって、この合戦の3ヶ月後に甲斐国（山梨県）から浅野幸長が和歌山に入りました。新
宮には家来の浅野忠吉が入り、お城を築きました。しかし、1619年（元和4年）に大名配
置替えのため浅野氏は広島に移りました。家来で新宮の殿様である浅野忠吉も三原（広島
県）に移りました。替わって駿府城（静岡県静岡市）の殿様 徳川頼宣が和歌山城に入り、
頼宣の家来の水野重仲は新宮城に入りました。

* 徳川頼宣は、8代将軍 徳川吉宗の祖父です。
8代将軍 徳川吉宗は、紀州藩の5代目の藩主でもありました。



（丹鶴城 想像した模型） 倉本隆之作



（正保の城絵図より 左側に熊野川）

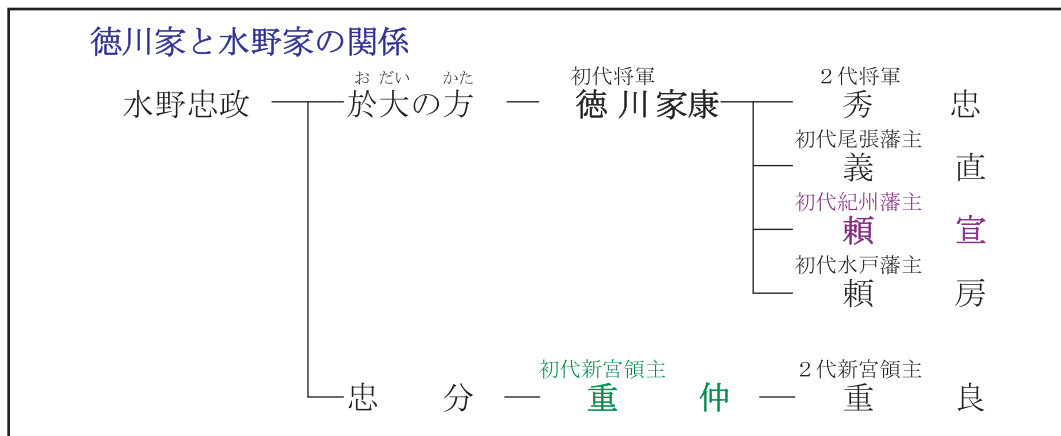


（丹鶴城 模型） 倉本隆之作

新宮領の殿様水野重仲は家康といとこ

徳川頼宣は、徳川家康の10男で、わずか2才で大名（殿様）になりました。幼い息子のことを思い、家康は信頼できる自分の家来2人を息子 頼宣の“もり役”として家来に付けました。安藤直次と水野重仲です。紀州藩と同じ徳川御三家の尾張徳川家、水戸徳川家にも“もり役”の家来が付けられました。

徳川家康の母 於大の方と、水野重仲の父 忠分とは姉と弟の関係です。つまり、重仲と家康とはいとこ同士でした。重仲は主人 徳川頼宣が駿府城の殿様になった時に、家康が長い間住んでいた浜松城（静岡県浜松市）が与えられました。重仲は11年間、浜松にいました。しかし、主人 徳川頼宣が紀州の殿様になることで重仲は浜松を離れることになりました。もう一人の家来 安藤直次も掛川（静岡県掛川市）を離れました。



(丹鶴城 大手道)



(本丸の石垣)



(水の手郭) 備長炭を江戸まで運んだ

七里御浜の黒松林

浜松から来た水野の殿様

徳川頼宣は紀州藩の藩主（殿様）となって和歌山城に入り、頼宣のもり役の水野重仲は新宮領の殿様に、もう一人のもり役の安藤直次は田辺領の殿様になりました。

水野重仲は、自分の領地となった新宮に入って間もなく、熊野市内の自分の領地を見て回りました。熊野市内の水野家領は、井戸、有馬、久生屋、金山、神川町花知、育生町大井の地区でした。有馬地区を訪れた重仲は、新宮・有馬間の七里御浜街道の整備が必要だと考えました。そして、「海岸線には防風林が必要だ」と、前の領地だった浜松（静岡県浜松市）から黒松の苗木を取り寄せて、七里御浜一帯に植林しました。その後も代々新宮の殿様が、特に有馬の浜にこまめに黒松を植えました。その黒松が生長し、有馬の海岸はりっぱな松林となりました。水野の殿様が築いた七里御浜の黒松林は、今もなお私たちの生活を守っています。



（昔の有馬松原）



（七里御浜海岸） 現在も防風林の役割を果たしている海岸線の樹木

昼なお暗く寂しい有馬松原

有馬松原は長く、両側の松の木は道をおおい、とても暗い街道でした。江戸時代の歌人に、紀州藩に仕えた加納諸平という人がいました。新宮から熊野川を渡るとき、「急げ早よこげ成河（成川）の渡し 有馬松原日がくれる」と詠みました。「急いで成川の方に渡らないと有馬の松原は暗くて歩けない」という意味です。昔の小学生がここを歩くと泣きそうになるほど寂しい所でした。江戸時代の記録「熊野見聞記」を読むと、有馬松原の幅は東西に300mもあったと書かれています。

第二次世界大戦中（1939年～1945年）、飛行機の燃料となる石油が手に入らず、石油の代用品となる松根油をとるためにたくさんの松が切り倒されました。また、1992年（平成4年）12月には、とても多くの松がマツクイムシの被害で枯れてしまいました。

* 渡し…船などで対岸に人を渡す所。

江戸時代は、大きな川の熊野川には橋がかかっていませんでした。

そのため、対岸に行くには、渡しの所で船に乗る必要がありました。



（昼なお暗く寂しい有馬松原）道の両側に松林があり、昼でも暗かった

奥熊野代官所

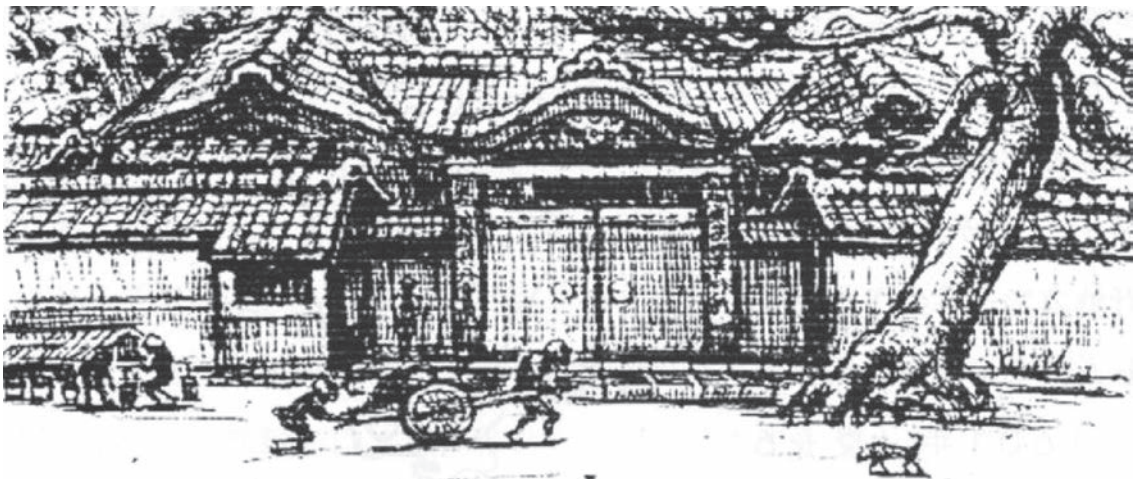
1619年（元和5年）、紀州の殿様だった浅野長晟が大名配置替えのため安芸国 広島に移り、替わって、徳川家康の10男 徳川頼宣が駿府城（静岡県静岡市）から和歌山城に入り、紀州藩の初代藩主になりました。

奥熊野の中心・木本

紀伊国を名草・伊都・日高・海草・有田・那賀・牟婁の7つの郡に分けて代官所を設けました。代官所は1つの郡に1ヵ所を原則としました。しかし、牟婁郡は、およそ現在の三重県北牟婁郡紀北町長島から和歌山県西牟婁郡白浜町、田辺市のはしまでと、とても広いものでした。そして奥熊野の地域は、山間部が多く、北山郷（飛鳥、五郷、神川、紀和）を中心とする一揆に対する備えもあって、牟婁郡を「口熊野」と「奥熊野」に分けました。そして、和歌山県の周参見に「口熊野代官所」を、木本に「奥熊野代官所」を設けました。

紀州の殿様のいる和歌山城から見ると、周参見の方が和歌山に近いので「口熊野」、木本の方が遠いので「奥熊野」という名が付けました。（P52「口」と「奥」を読もう！）

木本の奥熊野代官所は、当時の100か村を治める熊野地方で一番大きな役所でした。この木本の代官所は、1601年（慶長6年）、浅野長晟の兄 浅野幸長が殿様の時に設けられました。



（奥熊野代官所）

木本の代官所

代官所の建物は総面積約1200㎡で、周りを白い土の塀で囲み、中には、役所、非常用の米の倉庫、武器や弾薬を入れておくための倉庫、罪を犯した者を入れておく牢屋などが並んでいました。新宮とその周辺は、紀州徳川家の家来 水野氏の領地であったため、奥熊野地方は、紀州徳川家の和歌山本藩領（表領）と新宮水野家の新宮領（裏領）とに分かれていました。現在の木本町、新鹿町、飛鳥町は和歌山本藩領で奥熊野代官所の支配が及

び、井戸町、有馬町、金山町、久生屋町、紀和町入鹿などは新宮藩の領地で水野氏の支配が及んでいました。

和歌山本藩領…須野、甫母、二木島里、二木島、遊木、新鹿、波田須、磯崎、大泊、木本、育生、
神川、五郷、飛鳥、

紀和町（赤木・長尾・平谷・大河内・丸山・矢ノ川・大栗須）

新宮藩領 …井戸、有馬、金山、久生屋、神川町^{はなじり}花知、育生町大井

紀和町（小森・木津呂・小川口・湯ノ口・小栗須・花井・小船・楊枝・楊枝川・和気）

代官所の仕事

代官所は、現在の市役所、警察署、そして裁判所^{さいばんしょ}といった機能^{きのう}を持った役所で、農業に関する仕事も行なっていました。江戸時代の終わり頃の安政年間(1854年～1859年)に「木本、神川を和歌山本藩領から新宮領にする」という領地替え^{あんせい}の問題が起り、大きな騒動^{そうどう}となりました。この「村替騒動^{むらがえ}」はここ木本の代官所が解決しました。

(P91 “安政の村替騒動” を読もう！)

代官所は、住民の生活に直接結びついた役所でした。奥熊野代官所のある木本は、江戸時代約260年もの間、三重県紀北町から和歌山県田辺市本宮町までの広い地域の政治の中心として栄えました。

1876年（明治9年）1月からは木本学校（現木本小学校）の校舎となり、1884年（明治17年）、校舎の建て替えによって、白い壁^{かべ}に囲まれた代官所は姿を消しました。門前にあった大きな松は、「代官松^{だいかんまつ}」と呼ばれ親しまれていましたが、枯^かれてしまい、残念なことに切り倒^{たお}されました。



（代官松） 木本町井筒町

木本にある天理教南紀大教会の前にあった

* 「木本小学校 校歌」の歌詞にこの代官松が出てきます。

2番 明るく学ぶ 良き校舎

仲良く遊ぶ校庭に 見上げて高き 松ひと木

強く生きよと 教えおる 熊野市木本小学生 皆仲良しの子どもたち

紀州藩の海の守り

たてがさきとおみばんしよ 楯ヶ崎遠見番所

紀州藩は、紀伊半島の南部に位置し、その海岸線は300kmに及ぶ長いものでした。

1619年（元和5年）、徳川家康の10男 徳川頼宣が、紀州藩主となって以来、藩では代々、海岸の守りを重大な政策目標にしてきました。

1639年（寛永16年）、江戸幕府は「異国船（外国船）渡来禁止令」つまり、「外国の船は日本に入ってはいけない。」という命令を出しました。当時、九州地方で基督教の信者が増え、「このままでは日本はスペイン、ポルトガルに侵略されてしまう」とおそれて出したものでした。基督教を広めることに関心のなかったオランダ、中国（清）、朝鮮の3国を除いた国の船が日本にやって来ることを禁止したのでした。日本は200年以上にわたる長い「鎖国の時代」に入ったのでした。

この鎖国政策がとられる前の1635年（寛永12年）、海岸の守りに関心の深かった紀州藩は、田倉（和歌山市）から田曾（三重県南伊勢町）までの熊野灘沿岸に灯台と遠見番所を設けました。遠見番所は15ヶ所に設けられました。

私たちの熊野市にも遠見番所は設けられました。楯ヶ崎遠見番所です。楯ヶ崎の北、標高264m、浦母町と須野町の境にありました。この場所はとても見晴らしが良く、晴れた日には南に太地崎（和歌山県太地町）、北に九木崎（尾鷲市九鬼町）を見渡すことができます。

遠見番所には、食料を備えて、いつも2人の番人がつめていました。行き交う船を見張り、外国船などのあやしい船を発見すると、「狼煙」をあげて隣組に伝えました。そのため、遠見番所の近くにはかならず「狼煙場」が設けられました。

楯ヶ崎遠見番所跡の近くには、高さ1mほどの石垣、水がめ、縁石が残っています。屋敷跡の広い平地は番人たちが開こんしたと思われる畑の跡です。



（楯ヶ崎遠見番所跡）



（遠見番所から太平洋を望む）

いこくせんえず 異国船絵図

海岸線にせまる外国船がどこの国のものかを見分けるために、遠見番所には外国船の姿を描いた「異国船絵図」が備えられていました。

この絵図は江戸時代の終わり文政の頃（1818年～1829年）、異国船（外国船）がやって来たとき、船がどこの国のものかを確認するために作られたものです。絵図の船の種類は、琉球（沖縄）船、唐（中国）船、オランダ船、ロシア船の4種類です。ロシア船の説明文には、イギリス船にも似ているとあることから、当時は、5カ国の船が熊野の海に現れていたと考えられます。

ロシア船の絵図の中に、「文政九年」（1826年）と記されています。橇ヶ崎遠見番所の番人をつとめてきた家には、人を捕まえるための道具として突棒、刺股、袖搦が伝わり、これは現在熊野市歴史民俗資料館（有馬町）に保管されています。



* 三つ道具 … 江戸時代、犯人を捕まえる道具（写真上から順に刺股、突棒、袖搦）

船印

船の所有者や所属している国を明らかにするために、船尾に旗を掲げます。国旗が掲げられていない船は、海賊船と判断されました。



琉球船



唐(中国)船



オランダ船



ロシア船

(異国船絵図の写真)

遊木の狼煙場のろし ば

遊木ゆき（遊木町）→猪ノ鼻いののはな（磯崎町）→口有馬大般若だいはんにゃ（有馬町）…→和歌山城

楯ヶ崎たてがさきで上げられた狼煙のろしは、遊木（遊木町）→猪ノ鼻（磯崎町）→口有馬大般若（有馬町）…

の順にリレーされて、和歌山城まで伝えられる仕組みでした。和歌山城にまで伝えられたのは、紀州藩の殿様がいたからでした。ほとんどの狼煙場は、現在ではその姿を失いましたが、遊木の狼煙場は今なお、その姿をよく残しています。

ここの狼煙場は、遊木町の集落の東側の小山の上しくにあり、保存状態は、数ある狼煙場の中で最高の状態です。高さ1mほどの石積みかんが5m間かくほ ぞんじょうたいに三つならんでいます。現在では「石まんじゅう」のようにしか見えませんが、元は井戸のような形に積み上げていたものです。

狼煙おおかみ ふんは狼の糞をかわいた松の葉に混ぜ、火をつけて黄色い煙を上げるものとされました。当時は生活のために各家々から白い煙が上がっており、おそらく、それらの煙と区別する必要があったのでしょう。狼の糞を手に入れることは簡単ではなく、番人たちはそれにずいぶん苦勞したようです。

この狼煙場の制度は、実に1869年（明治2年）までの長い年月続けられました。



(遊木の狼煙場)

ほげい 熊野の捕鯨

くじら くようとう 二木島にある鯨の供養塔

ほげい たいじ
捕鯨といえば、「太地」があまりにも有名です。わたしたちの熊野も昔は捕鯨がさかんに行なわれていました。奥熊野地方の捕鯨は、江戸時代の初め頃（1600年頃）から盛んで、紀州藩は鯨方役所を九木浦（尾鷲市九鬼町）に置き、奥熊野地方では、二木島、木本、遊木が捕鯨の中心地でした。

鯨は、古くは「勇魚」と書かれていました。鯨の肉は食用に、油は灯油や食用に、骨は加工の細工ものにされ、捨てる所がありませんでした。そのため「鯨一頭七浦うるおう」（鯨一頭とれば7つの港町が活気づく）と言われました。鯨の油は、長崎の五島列島のものと、ここ熊野のものが一番いいという評価を得ていました。

JR二木島駅の裏山の斜面に浅間神社があり、その登り口に、1671年（寛文11年）に建てられた高さ1.3mの「鯨の供養塔」があります。国内にある鯨の供養塔としては一番古いものと言われています。



（モリを高く投げ鯨を狙う 太地くじら浜公園）



（二木島の鯨の供養塔）

徳川重倫と又吉

東紀州の熊野古道「伊勢路」は、参勤交代（大名行列）の道ではありませんでした。では、紀州の殿様が私たちの熊野に来たことがなかったかということ、そうではありません。紀州藩の歴代の藩主（殿様）は藩内の生活の様子を知るために、領地のすみずみまで見て回りました。藩主の目的は、そこに住む人々に直接会って実際の生活を知り、紀州藩としての政策をたてるための資料を得ることでした。8代藩主だった徳川重倫（1746年～1829年）が、1799年（寛政11年）私たちの熊野にやって来ました。

徳川重倫は、とても短気な人で、気分しだいで何をしでかすか分かりません。そのため、ついたあだ名が「大殿様」。この短気な性格がわざわいして、いろんな事件を次々と起こしてしまいました。そのため、重倫は30才の若さではありましたが、藩主（殿様）をやめるよう江戸幕府から命令されました。

重倫は、「大殿様」といわれた人物ですから、この殿様をおかえる側の者は、それはもう大変でした。

二木島地区に残る記録「荒坂村郷土誌」には、次のことが書かれています。「紀州藩の元藩主だった徳川重倫は、二木島にやって来ました。そして、鯨突取りの漁法を見物されました。このとき、二木島里浦の「又吉」は、鯨の格好をして、海中に入っていました。その鯨を見た重倫は、モリを手に取り、鯨めがけて投げつけました。舟をこいでいた人は、モリが又吉に当たらないように船を揺らしました。そして、鯨の格好をした又吉は上手に泳いだことで、モリが当たらずにすみました。本物の鯨と信じて疑わなかった重倫は、本当のことを知り、大いに喜びました。重倫は又吉を呼び、「斎藤」の姓とほうびを与えました。」

重倫の大きなぞうり

二木島の帰りに立ち寄ったのが、木本にある奥熊野代官所でした。休けいを終えた重倫は駕籠に乗り込みました。お付きの者が、今まで重倫が履いていたぞうりを捨てようとしていました。その様子を見ていた代官所の者が、「捨てるのなら、そのぞうりを私にいただけませんか」と声を掛けたところ、幸いなことにそのぞうりを受け取ることができました。このぞうりは、受け取った者の子孫の方々が代々受け継ぎ、現在、有馬町にある熊野市歴史民俗資料館に保管、展示されています。



(伝 徳川重倫のぞうり)

くじら ななうら 鯨一頭で七浦うるおう

木本にも脇ノ浜近くに「鯨の供養塔」があります。1880年（明治13年）のある秋の朝早く、シャチに追われた一頭の大ナガス鯨が脇ノ浜の波打ちぎわにはね上がりました。このとき浜の近くで野宿していた一人の男の人がこれを発見し、町内の漁師に急いで知らせました。木本の漁師たちは、あわててかけつけ、ついに、この大ナガス鯨をつかまえることに成功しました。この鯨には、1500円という高い値段がつき、売れました。



（木本の鯨の供養塔）

学校を新築

鯨のもうけの一部500円の寄付と、1881年（明治14年）七里御浜が災害にあった時に倒れた木を利用して、古くなった木本学校（現在の木本小学校）の校舎を2階建ての新しいものに建て替えました。鯨一頭とれば、莫大な利えきをもたらしたというのは、このことからよく分かります。木本小学校は、「鯨で建てられた学校」として有名になりました。

木本の人たちは、鯨の売り上げのお金を生活費にあてるより、未来ある子どもたちの教育のために学校の建設を最優先にしました。校舎を前に、子どもたちはみんな笑顔です。

この鯨を発見した人は、岡山から和歌山を通り、ふるさとの水戸（茨城県水戸市）に帰る途中の元武士でした。鯨の発見で木本は大変活気づき、発見した人は町の人たちからとても感謝されました。その元武士は、当時の木本のリーダー南大助から、新たに「脇浜」の名字を頂き、木本に住み暮らしました。



（新築された木本小学校校舎）とても立派な校舎で代官所跡に建てられました

すいしゃだに

水車谷 と 銅山

紀和町における鉱山開発の歴史は古く、奈良時代（710年～784年）の頃から鉱山業が営まれていた土地です。採掘した坑口がいたる所に見られます。

入鹿紀州鉱山という、「板屋」を思いうかべる人が多いですが、坑道が多く掘られている所は、湯ノ口、大河内、楊枝川地区です。板屋には鉱山の事務所や銅を精錬する選鉱所があったくらいです。

紀和町では銅をはじめ、金や銀が採掘されていたと伝えられています。東大寺大仏建立、慶長小判、伏見城の構築、名古屋城、日光東照宮などにこの地の銅や金が納められたそうです。

703年	(大宝3)	楊枝鉱山の自然銀を献上したと伝えられる。
743年	(天平15)	東大寺大仏建立のための銅が供出された。
1594年	(文禄3)	伏見城の築城
1596～1615年	慶長年間	慶長小判
1609年	(慶長14)	小森銅山から名古屋城の金の鯨修理のための金が採掘。
1636年	(寛永13)	楊枝鉱山より日光東照宮造営のための銅が供出された。



(名古屋城)



(奈良 東大寺の大仏)



(慶長小判)



(金坑跡) 紀和町



(滓) 紀和町 粗銅が採られ残ったカス

奈良時代 710年～

743年（天平15年）奈良 東大寺大仏の建立のために銅を供出しました。

南北朝時代 1331年～

「延元二」の文字

大谷坑（上川堅坑）の岩かべに「延元二」（1337年）と刻まれた文字があります。それは、大谷坑の坑口から5mくらい奥の休憩場所にあります。「延元二」の延元は、南朝方の元号です。この文字からして、この鉱山では14世紀前半の南北朝時代には盛んに採掘が行なわれていたことが分かります。この文字は、坑夫の落書きで、この落書きが鉱山開発の年代を知る貴重なものとなりました。



（銅山に残る「天保八」「延元二」の文字）

江戸時代 1603年～

安土桃山時代から江戸時代に入って、金山、銀山が盛況を極めました。元文年間（1736年～1741年）、徳川幕府が土地の者に採掘させていました。その後、紀州藩、新宮藩が紀和町にある銅山を採掘しました。紀州藩、新宮藩にとってはまさに「宝の山」でした。

「天保八」の文字

この「天保八」（1837年）の文字は、「延元二」年（1337年）より500年後、江戸時代後期のもので、鉱石の採掘が再開されたことを物語っている。その岩かべの文字には、「米代二百文」とあり、天保の大飢饉の時に米代が200文に上がったといういかりを岩盤に彫り付けたものではないかと思われています。この同じ天保8年（1837年）に、大坂（今の大阪）では町奉行所の元与力 大塩平八郎が貧しい人たちを救うために起ち上がるという事件（大塩平八郎の乱）が起きています。

時代は下って、日清戦争当時（1894年～1895年）、金の延べ板13枚を軍費として献上した者がいたそうです。その金の延べ板には、「紀州大谷銅山製」と刻印されていたそうです。献上した者は紀州徳川某侯（紀州徳川家のだれか）とあり、年代を考えると紀州徳川家15代当主 徳川頼倫でしょうか。

30 数箇所の鉱山

人ひとりがやっと通れる細い坑道（狸掘り）は「のみ」と「つち」による手掘りで作られたものです。江戸時代は、地表に出ている鉱脈に沿って掘っていく簡単なものから、堅穴を掘ったり、鉱脈に沿って地中へ掘り下がってゆく方法などで採掘されたりするものがありました。

水車谷

楊枝川地区の水車谷付近一帯は、「黄金の森」と呼ばれていました。

「水車谷」は、土地の人々が呼んでいた名で、本当は、「医王山入会山」と言いました。鉾山では米の飯を食べさせてくれたので、全国各地から人がたくさん集まりました。坑夫は、通行手形にもなる「坑夫取立免状」を持って全国を渡りました。水車谷には、江戸時代の坑道跡、窯跡、鉾山街の番所、御役所の屋敷跡や墓石群が残っており、当時の繁栄を想像することができます。

「一山は一國たるべし。他の指揮に及ばず」と鉾山の法律である「山例五十三箇条」には書かれています。当時の鉾山町は、特別な自治組織になっており、治外法権でした。町に入るのは簡単でも、外に出ることは非常に困難で、許可なしに出られませんでした。



(熊野市紀和鉾山資料館 展示模型)

焼窯跡

江戸時代の窯が、昔のまま残されています。この窯で鉾石を焼き、硫黄を亜硫酸ガスとして50%くらい取り除きます。残りの鉾石は熊野床で精錬しました。亜硫酸ガスの影響で近くにある松は、300年も経つが成長が著しく遅いといわれています。ここで働いた人は、25歳前後で死んでいます。それは、ガスの知識がなく働いていたためでした。



(焼窯跡)



(焼窯跡の内部)

三次郎ばなし

江戸時代には身分制度が完全に固まって、農民に生まれた者は一生農民を、職人に生まれたものは一生職人を続けるものと定められていました。あらゆる特権は武士に集中し、庶民たちはそれに従うしかありませんでした。しかし、庶民たちは民話や芝居の中で、しばしば武士や金持ちをとんちを使ってからかったり、やっつけたりしてうさを晴らしました。ここにあげる「三次郎ばなし」もそれらの仲間、まず貧しい暮らしをしている三次郎が、さまざまな知恵をめぐらせて、日ごろの自分をさげすんでいる金持ちや、侍たちをやっつけるゆかいなお話です。



(木本のにぎわい)

「へべ」の実売り

熊野市の山間部、飛鳥町佐渡の大又川近くのやぶのそばに、三次郎という男が貧しく暮らしていました。

あるとき三次郎は、近くの山で「へべ」の実を採って来て、評議峠を下って木本まで売りに行きました。その頃の木本は近郷から人が集まるたいへんにぎやかな町でした。ずらり並ぶ店の軒先には人があふれ、通りを何台もの荷車が行きかかっていました。

* 「へべ」とは、イヌガヤのこと。実をくり抜くと笛になる。

三次郎の身なりといえば、あかだらけ、継だらけの粗末な着物に草鞋ばきという姿でした。町の人々はあきれた顔で三次郎を見つめていましたが、三次郎はそんなことはおかまいなく、いせいよく「へーべー、へーべー」とどなって歩きました。やがて、本町通りを過ぎ、細い通りに入って代官所が見えてくると、ひととき大きな声で「へーべー、へーべー」とどなりました。

屋敷の中でこれを聞いた代官は、「おのれ、わしの名を呼び捨てにするとは、なにやつじゃ、すぐさまひっとらえよ。」と番人たちに命じました。実は、その頃の代官の名が「平兵衛」だったのです。代官の前に引き出された三次郎は、平然とへべの実を指さして、「わしは、へべの実はいらんかと言って、売り回っているだけじゃ。」と言っただけでした。代官は腹は立ったけれども、物売りの売り声まで罰するわけにはいかなかったので、許さないわけにはいきませんでした。

奥熊野代官所役人一覧表には、「今泉平兵衛」の名前が載っています。



(へべ)



(怒る代官)

カラス売り

また、あるときはカラスを1羽ふところの中にかくし、手にはキジを持って、木本の町中を「カラスはいらんかー」と呼んで回りました。

町の人たちは、「かわいそうに。あの男はカラスとキジの区別がつかないのだ。」と、三次郎をあわれに思っていました。そのうち、ある人が、「よし、こいつは頭が悪くて、キジのことをカラスと思っているようだな。ここはひとつ、こいつをだましてキジを安く買ってやろう。」とたくらんで、三次郎に声をかけました。

「おい、兄さん。カラスはいくらかの。」

「はあ、100文^{もん}じゃわい。」

男は、キジにしては安いと思ったので、「よし、カラスを買おう。」と言って、三次郎に100文を渡しました。

三次郎は、「おおきに。」と言うと、ふところからカラスを取り出して、男に差し出し、意気揚々と引き上げていきました。



(今なお残る数多くの旧家) 木本町西川町^{きゅうか}

岩を切り転がす

熊野の山間部は平地が少なく、人々はせまい田畑を必死に耕し、少しでも多くの収穫しゅうかくを上げようと懸命けんめいでした。どの家もくらしは豊かではありませんでしたが、田植えや取り入れの時期には村中が助け合っていました。

さて、佐渡さわたに「長者ちやうじゃさま」とよばれる家がありました。広い田んぼを何十枚も持ち、作男さくおとこをやとって耕たがさせていました。しかし、ずいぶんけちんぼうな長者で、近所に不幸があっても見舞みまいはしないし、村祭りのときでさえ寄付きふを惜おしむほどで、村人からはあまりよくは思われていませんでした。

* 作男…やとわれて耕作をする男のこと

長者の楽しみは、高台の上から自分の持つ田んぼの広がりを見ながめることでした。でも、ただひとつ気に入らないことがありました。それは、田畑の真ん中に大岩が一つでんと座すわっていることです。

「だれぞ、この岩を切り転がしてくれんかのう。」

それを聞きつけた三次郎。

「そんなの、たやすいことじゃ。」

と、胸を張りました。

長者は大喜び。三次郎を家によんでごちそうしました。

腹いっぱいごちそうを平らげた三次郎は、長者といっしょに田んぼに出かけると、ねじりきりはちまきをして大岩の上に上がり、錐きりをコロコロと転がしました。



(錐)



(飛鳥町佐渡)

しちぐら 寺谷の質倉

おしいれがた 御仕入方役所

いさと 五郷町の寺谷地区に、板で囲われ、一部が白い壁の古い倉があります。この建物は、1768年（明和5年）に建てられた御仕入方役所の質倉です。御仕入方役所とは、「山間部やへき地の貧しい農村や漁村の人々の生活を救い、産業を盛んにするため」に紀州藩が人々にお金などを貸し付けた役所のことです。1657年（明暦3年）に紀州藩が定めた、この藩独特の制度でした。また、紀州藩は、「人々が生産した物を買上げ、他に販売する」ということもしました。お金を借りた人は、生産した物を返済金にあてたりしました。

私たちの熊野に設けられた御仕入方役所は、木炭をはじめとして林産物、カツオ節・干物などの海産物、薬草などを主に集めました。

大きな利えきを生んだ役所

御仕入方役所を設けた初めの目的は、「貧しい人の生活を助ける」ことでしたが、その目的に従って仕事をしていくうちに、役所自体に利えきが生まれました。そして、しだいに役所の目的も「紀州藩の利えき」を求めることに力点が置かれるようになっていきました。御仕入方役所の上げる利えきは紀州藩の財政を大いに豊かにしました。それで、私たちの熊野にもこの役所が置かれることになったのでした。

まず 貧しい人たちに やさしい役所

農家の人たちが農地を耕すとき、役所はただ同然で馬や牛を貸したりして仕事に協力しました。また、役所は、猪垣を作ったり修理したりする人にふるまうご飯に使う米を貸したり、お金に困っている人には、借りたお金を返すことの保証となる物を差し出しさえすれば、お金を貸し出したりもしていました。お金を借りた人は、長い期間借りられ、しかも返す利息も少ないのでとても助かりました。

くじら くようとう 二木島にある鯨の供養塔

五郷町の寺谷にある質倉は、当時をしのぶ貴重な建物で、現在は熊野市の指定文化財となっています。建物の間口は約10m、奥行きは約6mあり、木造2階建てで、内部はがっしりとした合掌造となっています。この質倉には、山の人たちの生産物が集められました。

* 合掌造…屋根を支えるために木材を八形に組み合わせたつくりの建物。

この質倉の壁や柱には、「文久二」年（1862年）の日付の記された「大橋伝四郎」という人による「手質調べ」という署名など、たくさんの書き込みが残されています。

寺谷の御仕入方役所は、1711年（正徳元年）に設けられ、質倉は1768年（明和5年）に建てられました。しかし、1852年（嘉永5年）にこの役所は廃止となりました。また、役所の事務は木本の役所（木本二分口役所）に引き継がれたために、質倉はもういなくなりました。その後、五郷町の齋藤喜寛さん個人の所有となって今日にいたっています。



(寺谷の質倉)

今日に残る木本の「町割り」

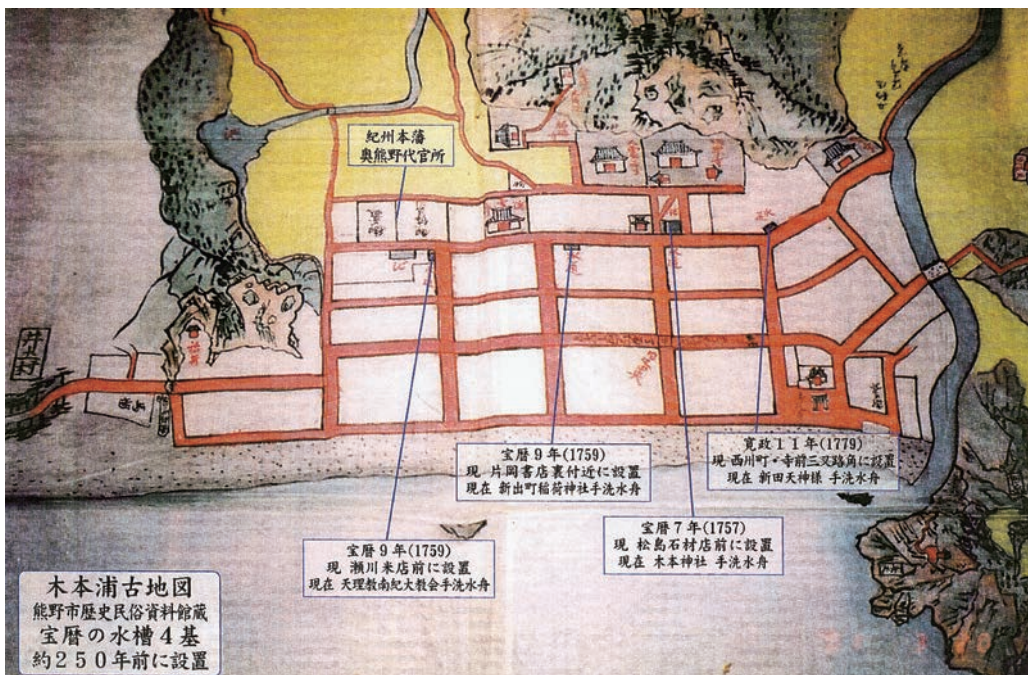
代官所が置かれた当時の木本は、道はせまく、しかも入りくんでいて、荷車も通行には不便な状況でした。そこで、紀州藩は代官所と同時に木本の「町割り」を行い、通りと家なみを整理しました。これは現在にもほぼそのまま受けつがれていて、木本は江戸時代の「町割り」が現在に残る町として知られています。

下の「木本浦古地図」に奥熊野代官所が見えます。ここが奥熊野100か村の中心ということになります。お寺が5つ確認できます。右から称明寺、極楽寺、大雲禪寺、祐福寺、そして現在市民会館横にある瑞雲寺があります。木本の切立の山から流れる高城川、新田の山から流れる西郷川の2つの川は、水の便の悪かった木本の人たちにとってそれは大事な大事な川でした。水汲みのわずらわしさを和らげるために浜地太右衛門は、4カ所に石でできた水そうを設置します。

高城川の下流に池を見つけることができます。ひとたび大雨が降ると、この池は氾濫し木本の人たちを困らせました。明治に入って、木本の戸長 森本佐兵衛のがんばりで要害山にトンネルを掘り、池の水を井戸川に流すことに成功します。池の横は要害山です。ここは要害山城という城で、この城があったからこそふもとに奥熊野代官所が設置されます。

地図の左端下に神社が見えます。新出町の稲荷神社です。稲荷神社の鳥居の横にある家が、木本の一番端になります。その家の隣には、石をきれいにしきつめているのを見つけることができます。木本と井戸の境界で、江戸時代は和歌山本藩と新宮水野領との境界で、廃藩置県の際は和歌山県と新宮県の県境でした。

(P51 “紀州藩の領地” と P96 “廃藩置県” を読もう！)



(木本浦古地図 奥熊野代官所) 現在 天理教南紀大教会

おはなし

「木」や「鬼」の付く地名

市内には、「木」の付く地名があります。木本、羽市木、遊木、二木島です。「木」の付く地名が多いのは、私たちの住むこの地は、その昔は「木の国」と言われていたからでしょうか。

海岸線の地名に「二」「三」「八」「九」の文字

海岸線をたどると、数字の付いた地名があり、気になりました。二木島、三木、三木里、八鬼山、九鬼です。「二」「三」「八」「九」と数字が続いています。「一」「四」「五」「六」「七」の付く地名もあったのでしょうか。これらの地名には、法則めいたものがあり、数字の次に必ず「き」や「ぎ」がきます。

この法則?! にしたがって「一」を探してみましよう。「一」の次は「き」か「ぎ」ですね。「いちき」か「いちぎ」です。ありました、市木（御浜町）。熊野の歴史をまとめた本には「一鬼」という表記が出ています。「市木は、一鬼であった。修験者の一人が第一番に（市木で）道場を開いたので一鬼とした。」と書かれています。ということは、数字の次は「木」ではなく、「鬼」だったのでしょうか。

* 修験者…山の中で修業をする修験道の行者

続けて調べました。かつて二木島は「二鬼島」、三木・三木里は「三鬼・三鬼里」でした。この地を支配していた武将は「三鬼新八郎」を名乗っていました。昔、支配者はその地の地名を名乗ったことを考えると、三木・三木里は、かつて「三鬼・三鬼里」であったことはまちがいないでしょう。この予想は当たりですね。ますます「鬼」の文字が気になります。この古い本を紐解き、まとめてみました。



海岸線沿いに「木」や「鬼」の付く地名

一	一 鬼	市木。修験者の一人が第一番に市木で道場を開いたので一鬼とした。
二	二鬼島	二木島。
三	三鬼・三鬼里	三木・三木里。この地を支配していた武将「三鬼新八郎」。
四	四 鬼	四鬼。御浜町上野にある地名。坂上田村麻呂は四匹の鬼をつかまえた。
五	五 鬼	五鬼。奈良県吉野郡下北山村。前鬼、後鬼の鬼の夫婦 鬼の子孫（五鬼熊、五鬼童、五鬼上、五鬼継、五鬼助） 神川町出身の五鬼上堅磐は、弁護士から裁判官、最高裁判所判事となり、判事退官後は中央大学理事長を務めた。
六	見つからず	六は「碌」でもないから、この地名はない。※ あるという人もいる。
七	七鬼ノ瀧	七鬼ノ瀧（尾鷲市賀田町）。
八	八鬼山	八鬼山（尾鷲市九鬼町）。
九	九 鬼	九鬼（尾鷲市九鬼町）。九鬼の海は九木浦で、「鬼」ではなく「木」だ。この地から誕生した「九鬼水軍」の頭領は「九鬼」を名乗る。

数字が付かない「木本」「羽市木」「遊木」の地名

数字の次には「木」がくるのではなく、本来「鬼」がきたように思われます。そう考えると、地名に数字はつかないが、「木」の付く地名は、「木」ではなく「鬼」だったのではないかと気になり出しました。そこで、数字はつかないけれど、「木」がつく「木本」「羽市木」「遊木」の地名についても、続けて調べ、まとめました。

木 本	鬼 本	北山の五鬼は、木本を本家としている。鬼の本家→鬼本。 鬼の岩屋の本→鬼本 慶長の検地帳に、「鬼ノ本浦」の地名がある。 木本神社の封筒には、「熊野国 鬼本浦」と書かれていた。
羽市木	葉一鬼	修験者の第一番の道場のある市木からの別れの葉一鬼。
遊 木	遊 鬼	鬼の岩屋（鬼ヶ城）から逃げてきた鬼が遊んだから遊鬼といった。

八鬼山、九鬼以外の地名は、江戸時代になってから、「鬼」から「木」に文字が変わってしまったようです。もう一つ「鬼」の付く地名がありました。「鬼ヶ城」ですね。

自分が住む地区の名前の由来を調べてみるのも面白いかもしれませんね。

こんな字 鬼 見たことありますか？

鬼の字とはちょっとちがいます。何か欠けています。角がありません。九鬼水軍は九鬼（尾鷲市九鬼町）を中心にして勢力をのばしました。当然「九鬼」を名乗るのかと思えば、鬼の字に角がない「九鬼」と書き、「くかみ」とよばせました。この字『鬼』は、「おに」と読むのではなく「かみ」と読むんだそうです。

ほうれき

宝暦の水そう石

水の便の悪かった木本

江戸時代の木本は奥熊野地方の中心の町で、それはにぎやかな所でした。でも、水の便がたいへん悪く、木本の地底は、砂や小石が多いために簡単に井戸を掘ることはできませんでした。そのため、木本の人たちは、毎日、切立の奥にある高城川や、木本高校の横を流れる西郷川まで、水を汲みに行きました。木本の町で働く奉公人たちの大半は水汲みに苦勞させられました。

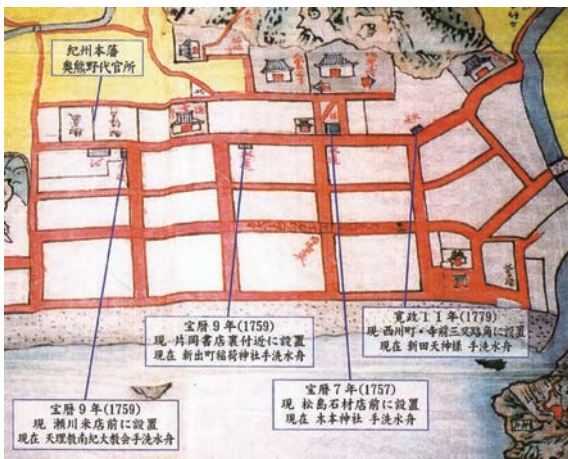
浜地太右衛門のがんばりが木本をすくう

当時、木本の庄屋（村長）だった浜地太右衛門は、水のとぼしい木本の不便を見かねて、1712年（正徳2年）に町内に水を引く工事を始めました。太右衛門は、川の水量や土地の高さを測ったり、工事にかかるお金の計算などをしたりしました。

切立の奥に流れる高城川から長い松の木で作った管を土の中にうめて、「木でできた水そう」に水をため、木本の人たちの生活の水としました。水そうは、木本の町の低い所に置かれました。浜地太右衛門のがんばりが、木本をすくったのでした。切立の奥の高城川の横には、太右衛門のがんばりに感謝する記念碑が立っています。



(記念碑)



(水そう石のある所)

この地図の左端上の高城川から
4つある水そうに木管を通して水が送られた。

がんじょうな水そう石

宝暦年間（1751年～1764年）になって、水路を整えなおしました。「木でできた水そう」にも限界がおとずれ、それに替わる水そうが必要となりました。それで、熊野地方で一番かたい曾根石（尾鷲の梶賀産）の大きな一枚岩をくりぬいて水そうを作りました。完成した水そう石に木材をたくさんしばりつけて筏を作り、曾根から木本まで運びました。大きな水そう石は、木本町内の4カ所に置かれました。この水そう石は、上水道ができるまでの長い間使われました。

- * 徳川家康が築いた江戸城の石垣の石は、静岡県伊豆の伊豆石が多く使われています。江戸城の天守台の石垣の石を見てみると、木本の水そう石と同じ尾鷲の曾根石がたくさん使われています。



(木本神社の水そう石)



(稲荷神社の水そう石)



(天理教の水そう石)



(天神社の水そう石)

熊野の“万里の長城” 田畑を守った猪垣ししがき

猪いのししによる被害ひがい

江戸時代、お米をたくさん作るために、新田作りがさかんに行なわれました。けわしい山が海岸線にせまる熊野灘沿岸では耕作に適した平地が少ないため、山の中にも田や畑が開かれました。しかし、猪いのししが山から里におりてきて農作物を食い荒らすということが続きました。江戸時代の中ごろからは被害ひがいが特に多くなりました。

被害を受けた農民たちは、「どうかしてほしい」と木本にある奥熊野代官所に願い出ました。

そして、この猪からの害を防ぐために、石垣いしがきが作られました。これが“猪垣”です。



曾根太郎坂そねたろうざかにある「猪垣」ししがき

大きな地震じしんにも耐えた猪垣

熊野古道を歩くと、この猪垣を多く見かけます。二木島の曾根太郎坂そねたろうにある猪垣は、1741年（寛保元年）3月から次の年の2月までの約1年間で作られたものです。この猪垣は高さ2m、幅1.2mもあります。石垣の途中には大きな穴が掘られ、そこに走ってきた猪が落ちるといいう仕組みになっていました。

この猪垣は1854年（安政元年）の安政東海地震や1944年（昭和19年）の東南海地震、そして1946年（昭和21年）の南海地震にも耐えました。これ程の大きな猪垣を作る必要があったということから、猪による被害がいかに大きかったか、想像されます。この猪垣を作ったことで、田や畑は、猪の害からまぬがれることができました。



（猪垣記念碑）

金山町にある “天保の飢饉の碑”

全国的な米不足

江戸時代のこと。飢饉が人々の生活を苦しめました。1782年（天明2年）から次の年の1783年（天明3年）にきびしい飢饉に見舞われました。「天明の飢饉」です。この飢饉の時、育生町では飢えて死んだ人が106人もいました。この天明の飢饉の後、寛政（1789～1800年）・文化（1804～1817年）・文政（1818～1829年）年間は天候に恵まれ、農業生産はほぼ順調でした。しかし、天保年間の1832～1833年（天保3～4年）、洪水や冷害によって米の収穫がいつもの年より半分以上となり全国的に米不足となり、きびしい飢饉に見舞われました。農村や都市には腹をすかした人々がみちあふれました。生活に苦しんだ親が自分の子どもを殺してしまうという悲しいこともおこりました。

* 飢饉 … 不作のために食べ物が足りなくなること。

百姓一揆 や 打ちこわし

江戸幕府や各藩はなんら適切な対策を立てることもできず、大坂（今の大阪）では町奉行所の元与力 大塩平八郎が貧しい人々を救うために起ち上がるという事件（大塩平八郎の乱）が起きました。このことがきっかけとなり全国に百姓一揆や打ちこわしが続けざまに起きました。

私たちの熊野でも、このときの飢饉による影響を受けました。金山は、もともと田畑の少ない所でした。また、金山は水野氏の新宮領で、採れた米の60%を年貢として納めなければなりません。それだけに飢饉に見舞われると生活はより苦しくなりました。幼い子どもの餓死者が多く、道ばたには旅人の行倒れが目立ち、志原尻（有馬町）では小判をくわえて死んでいた人がいたといいます。お金があっても食べる物がなかったのです。彼岸花の球根をさらして食べ、野草も食べられるものはかたっぱしから摘んで食べ、ツワブキなど萩内浜までも採りに行ったということでした。



（天保の飢饉の碑）

丸山千枚田



紀和町の通り峠から、丸山地区の山腹の急斜面一面に階段状に広がっている多くの田が一望できます。これが有名な「丸山千枚田」です。山の斜面を細かく区切った階段のような田んぼを「棚田」と言います。たくさんの棚田を「千枚田」と呼ぶこともあります。

丸山千枚田がつくられた時代は不明ですが、1601年（慶長6年）の検地帳では、すでに2240枚の水田がつくられていたとのこと。千枚田の段数は、100段近くあり、水平に4m行くと1m高くなるほどの急傾斜です。上の田から下の田までの標高差は100mもあり、土手は石積みになっています。

また、棚田は、一枚一枚の田の面積が小さいため、大型機械を使って作業ができません。今でもほとんどが手作業で米を作ります。しかし、効率化や機械化が求められる時代の中で、棚田の持つ良さが見直されてきています。

棚田の良さには、「水をためる役割をするため、洪水を防いだり、山の土砂の流出を防いだり」、「排水能力が高く、水をきれいにするため、さまざまな生き物が生息することができる」などのことがあり、生活のために山の斜面に開かれた田は、うるおいのある緑豊かな農村の美しい風景を作り出しました。



(昔の千枚田)

豊富な水と千枚田

この地方は、大台山系おおだいさんけいの一部となる山々に
囲まれている日本有数の多雨地域たうちいき すそので、裾野を
うめつくす朝の雲海は、千枚田をそして山す
そを駆け上がり峠か とげを越え、風伝風ふうでんおろしとなって尾
呂志側ろしがわへ流れ下ります。その雨や雲、霧きりから
もたらされる水が千枚田の水源すいげんとしての湧き
水になっているのです。

千枚田のやや上部に神社跡があり、その下
の近くの石垣のところに水が湧いています。
かつては、この湧き水があることから神社が
まつ祀られ、この神社を中心に田と屋敷集落が広
がっているのが、かつての日本の農耕文化の
原風景であると言われています。

山深いところにありながらも、豊かな湧き
水があり、棚田全体が南向きで日照条件にっしょうじょうけんが良
いことが丸山千枚田での米作りを支えてきた
と言えるでしょう。



(夕日に映える水を張った千枚田)



(丸山神社)



(初夏と冬で違った装いを見せる丸山千枚田)

これからの千枚田



(荒れていた時の様子)

戦後、1955年（昭和30年）から1974年（昭和49年）の高度経済成長の一方で、過疎化、減反政策、高齢化により、棚田は荒れはて、1993年（平成5年）には、田の数は530枚まで減っていました。

そんな中、丸山地区の住民が中心になって保存会が作られ、荒れた田を元の田にもどす作業に乗り出しました。雑木を切り、切り株を起こす作業等を行い、4年がかりで810枚（2.4ha）が復元され、合わせて1340枚（7ha）、その名の通り、千枚を超え、枚数でも面積でも日本最大規模の棚田となりました。一枚の田の広さは平均10坪で、大小さまざまな田が入り混じっています。

一番小さな田は、1㎡足らずで、稲は三株しか植えることができません。「一枚足りないと思ったら、傘の下にあった」という話も残っています。



(大小さまざまな田の様子)

旧紀和町時代、1994年（平成6年）4月に「紀和町丸山千枚田^{じょうれい}条例」を制定し、千枚田の景観保護にっそう努力することを宣言し、生産の場としての有効に活用するための政策を打ち出しています。そして、現在は「丸山千枚田オーナー制度」を実施し、全国各地よりオーナーを募るとともに、「一枚の田も減らすもんか！」のキャッチフレーズをもとに1999年（平成11年）に「丸山千枚田を守る会」をスタート、会員募集をする一方で日頃は、丸山地区住民による千枚田保存会と一般財団法人熊野市ふるさと振興公社が中心になって保存・維持・管理活動を行なっています。



(一番小さな田)



(稲刈り)

棚田のよいところ まとめ

- ・ダムのように水をためる役割をして、洪水を防ぐ。^{こうずい}
- ・山の土砂の流出を防ぐ。
- ・風景が美しい。
- ・水をきれいにする。
- ・さまざまな生き物が生息するのに適している。



(千枚田を見守る^{かかし}案内子たち)

りゅうぐうとう 松原の龍宮塔

「土用の丑」って知っていますか。この日にはウナギを食べる習慣があります。土用とは、ふつう立秋の前18日間の「夏の土用」を指します。この土用の頃に日本に波のうねりがよせてきます。

昔から七里御法に流れる川の河口では、土用の高波ともなると田んぼに潮が入りました。米の収穫に大きな影響が出るため、ふさがれた河口を急いで切り開かなければなりません。この「湊切り」は命がけの難しい作業でした。

1859年（安政6年）8月、井戸村に潮が入り、およそ100人ばかりの人数で井戸川河口を切りました。そのとき作業していた内の9人が、押し寄せる高波に流され死亡しました。この地域の人たちは、命を落とした人たちのことを悲しみ、そして、「高波に流されるのは、海の神 龍宮神が怒っているからだ」と考えました。この怒りをしずめ、二度とこのような災難がないようにと獅子巖の後ろの丘に龍宮塔を建てました。

この龍宮塔がある龍宮山頂では、毎年8月1日を龍宮祭りの日としてお祭りが今も続いています。

このような龍宮塔は、口有馬や志原尻にも建てられました。



(松原の龍宮塔)



(志原尻の龍宮塔)



(口有馬の龍宮塔)

しみなど 松原新湊

井戸川は「まっすぐ流れる川」というイメージがあります。江戸時代の井戸川は、紺屋地前こやじから釘くぎぬき橋おかじ～岡地うまどめ～馬ノ戸しん～松原でまち～馬留だこう～新出町いね浜と、大きく蛇行して流れていました。

井戸川下流の流れは、いつも馬留浜や新出町浜に流れているというのではなく、ときには獅子巖ししいわの方に流れを変えることもありました。夏の土用の高波には、河口はふさがれ、井土の田んぼには潮しおが入り、大洪水だいこうずいとなりました。そのため、稲が大きなひがいを受け不作となりました。こまった農家の人たちが集まって話し合いました。当時の大きく蛇行した井戸川を「まっすぐにして、松原から獅子巖へ水を流す路みちを作るといのはどうだろうか。そうすれば田んぼの洪水はなくなり、「湊切り」の苦労もなくなるのでは…」ということになりました。

機械きかいなどほとんどないこの時代、くわなどを使って大工事が始まりました。工事の場所は小瀬川商店しょうてん、小瀬川米穀店べいこくてんの辺りです。何年もかかってようやく、はば10m、長さ150m、深さ10mの湊が完成しました。ところが、考えたこととは逆に高潮ぎゃく たかしおの時になると、かえって潮が打ち込むという事態になりました。できたばかりの湊は何の役にも立ちませんでした。その後、明治の初めに井戸川は、大洪水によって今のような「まっすぐ流れる川」となりました。時間をかけて作った湊の堀むだは無駄なものとなり、やがてそこは畑となり、家が建ち、小字名「新湊」だけが残りました。



(昔の「新湊」)



(「新湊」の近くに鉄道が敷かれた)

とうろう キリシタン燈籠

尾鷲から木本に向かう熊野古道は、曾根次郎坂太郎坂を越えるといったん現在の二木島町逢川付近まで下り、JR二木島駅裏の町並みを通して再び登りに転じ、新鹿へと続きます。「キリシタン燈籠」は、熊野古道が駅裏の家並みから国道311号方面へと登りにかかる、ちょうどその位置の小さな石造りの庚申堂内にあります。

こうしんづか 庚申塚の中にキリシタン燈籠

庚申塚は村の入り口にあって、村の中へ病や不幸なことが入ってこないようにお守りの意味で建てたものです。たいていは高さ1m以内の石の塚で、表に仁王または猿の像を彫ったものや、「庚申」の文字を刻んだものなどがあります。二木島町に残っている庚申塚もこのようなものの一つで、石造りの堂でおおわれています。作られた時期は江戸時代の始めごろ（今から約400年前）と考えられる、古い庚申塚です。

堂の内部をよく見ると、ごく普通の庚申像に並んで、少し変わった形の像が建っているのに気づきます。これは石燈籠の柱の部分で、高さ90cmほどあります。写真の像の上の部分は丸みを帯びていますが十字をかたどったものと考えられます。また、下部中央の浮き彫りはガウンを羽織った人の姿を表しているようです。明らかに、キリスト教の信仰にかかわりのあるものといえます。



(熊野古道沿いの小さな庚申堂 キリシタン燈籠)

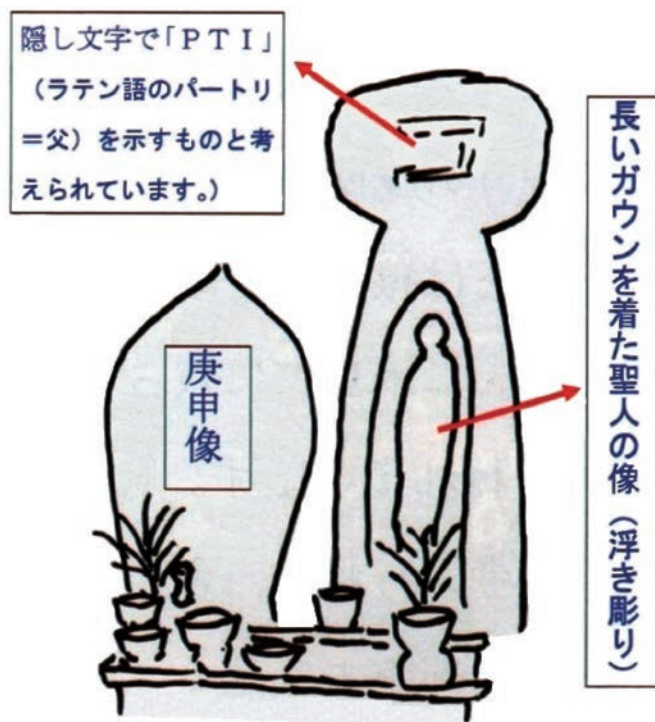
キリスト教を徹底的に弾圧した江戸時代

江戸時代はキリスト教の信仰が^{しんこう}かたく禁じられていました。各地では信者を発見するため「絵踏み」などが^{えぶ}広く行われ、信仰の事実を発見すると、きびしい罰^{ばつ}によって改宗を^{かいしゅう}迫りました。信者たちは、信仰の姿を^{かく}ひた隠しにしてひっそりと生活を送りました。彼らの中には、表向きは仏教徒をよそおい、ひそかに^{ぶつだん}仏壇の奥にキリストやマリアの像を^{おが}隠し、拝む者もいたようです。この地でも、名も知れぬキリシタンの人々が、「庚申さん」とよんでひそかにキリスト教の信仰を続けていたのにまちがいありません。

二木島町にこのような歴史の証人が残っているのは、この町が古くから“風待ち港”としていろいろな国から多くの船が立ち寄り、文化の交流が^{さか}盛んであったからでしょう。



(庚申堂の内部)



(内部の説明)

ただなか 水野忠央 ～9代新宮城主～

8代新宮城主 水野忠啓は、1835年（天保6年）病気を理由に隠居しました。その跡継ぎに指名したのが忠央でした。父 忠啓は、息子 忠央の才能を見抜いていたのか、年長の者を重んじる時代、4人の兄を差し置いて5男の忠央が21歳の若さで第9代新宮城主となりました。

忠央が新宮水野家を継いだ頃の紀州藩の内部は、大きな変動期にありました。藩主をしりぞいてからも60年をわたって紀州藩の実権をにぎっていた徳川治宝が亡くなりました。野心家であった忠央は、治宝をささえていた反対派の実力者を追い出してしまいます。忠央は、紀州藩の実権をにぎることに成功しました。



（水野忠央）

けんじつ 堅実な政治家

代々、財政難が続いていた新宮藩は、忠央の代になり、手がけていた事業のすべてがうまくいきます。製紙、製薬や捕鯨まで取り組みました。江戸の木材需要の3割を占めたとされる木材事業、年間10万俵も江戸に送られた紀州備長炭の木炭事業、さらに「熊野三山貸付」での富くじなどの事業が成功し、全国でも有数の裕福な藩になっていました。

* 富くじ … 抽選によってくじを買った者が賞金を得るもの。今の「宝くじ」。

大名になることを夢見て軍備を整えた

忠央は、藩から借りたお金を巧みな方法でずいぶんと増やします。蘭学に興味のあった忠央は、それを資金に蘭学所を建てました。また、海外の新しい知識を吸収しようとして外国語で書かれた軍備に関する本を翻訳させました。さらに、これらの本から得た知識を基に、新宮城の下で池田港で丹鶴丸（軍艦）を建造させました。丹鶴城には常に500挺の鉄砲や小銃、弾薬を備えていましたが、自分のお金で馬50頭、馬具などを買って家臣たちを鍛えました。忠央自身も馬に乗ることを得意とし、四斗樽を並べた上を駆け抜けました。これは丹鶴流といわれる洋式馬術で、薩摩藩の殿様も見物するほどすごいものでした。

* 蘭学 … オランダ語の書物によって、西洋の学術を研究しようとした学問。

文学も好んだ文武両道の殿様

武道が得意な忠央ですが、文学も好み、歌を詠みました。そして、古来の歌集、物語、医書、日記、紀行などを集めた、「丹鶴叢書」を刊行しています。この「丹鶴叢書」は、水戸藩の「大日本史」や塙保己一の「群書類従」とならぶ名著だと言われました。

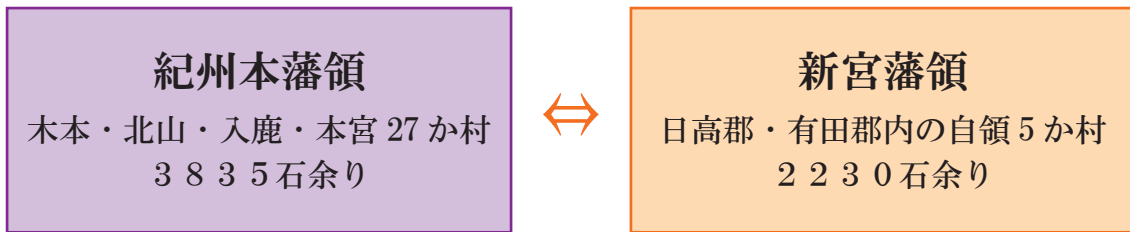
安政の村替騒動

1 あらまし

紀州藩は、紀州徳川家が直接支配する「和歌山本藩領」と、紀州の殿様の「もり役」（付家老）として江戸幕府が紀州徳川家の家来として付けた安藤家の「田辺領」と水野家の「新宮領」などがありました。（P51 “紀州藩の領地” と P96 “廃藩置県” を読もう！）

1854年（安政元年）11月、新宮の殿様水野忠央が奥熊野の和歌山本藩領（木本、北山、入鹿、本宮）27か村・3835石余りと、紀州藩の支藩である新宮藩領の日高郡、有田郡内の自領5か村・2230石余りとの領地替えの命令を出しました。このことに村人たちが抵抗して大きな騒動となりました。この事件が「安政の村替騒動」です。

* 1石 … 兵一人が一年に食べる米の糧とされる。



2 村替騒動の原因

（騒動の原因 1）

新宮藩の紀州藩からの独立、そして大名となることを目指した水野忠央の夢

もともと、新宮領には、日高郡、有田郡の領地がありますが、それらは新宮からほど遠く飛び地で、新宮の殿様水野忠央は、年貢を集めるときや支配していく上で不便を感じていました。また、当時、新宮藩は、外国船に対する海の守りや將軍家跡継ぎ問題の運動（南紀派対一橋派）に莫大なお金を必要としていました。忠央は、木本の二分口役所、熊野川の流域の支配、御仕入方役所の貸出金の取立てといった紀州藩の財政をうるおした役所や利権を新宮藩のものにしようとしていました。忠央にとって、得することばかりでした。

実現不可能とも思える領地替え

江戸幕府は、各大名の領地については、江戸の近くには古くからの家来譜代大名をつけ、関ヶ原の合戦以降の家来外様大名を江戸から遠くの地に配置しました。よほどの実力者でも領地替えは、実現不可能な願いでした。まして新宮水野家は大名の家来であり、その者の領地替えなど考えられません。それを忠央は、政治的権力と豊富にあるお金の力で紀州藩を押し、幕府をも動かして長年の願いを実現し始めてきたのでした。忠央は、「紀州藩から独立し、大名となり江戸城内で政治を行なう」という夢を抱いていました。

大名から格下げとなった新宮水野家

身分社会の江戸時代において、武士の身分も細かく決められていました。将軍の家来で1万石以上の武士は大名でしたが、大名の家来のもり役はそういう扱いを受けません。家康は、「大名扱いする」と約束しましたが、2代将軍 徳川秀忠はその約束など知りません。3万5000石を与えられていた新宮水野家が、大名にあこがれるのも無理はありません。紀州徳川家の家来である新宮水野家は、幕府からは大名扱いされませんでした。

* 天保の改革で有名な浜松藩主 水野忠邦は、新宮水野家とは親戚になります。

将軍跡継ぎ問題 出世のチャンス

13代将軍 徳川家定には跡継ぎがなく、14代将軍を誰にするか問題となっていました。このとき跡継ぎの候補にあがったのが、紀州 徳川慶福（南紀派）と一橋 徳川慶喜（一橋派）の2人でした。この2人による跡継ぎ争いが始まりました。水野忠央にとって紀州藩から独立する絶好のチャンスでした。もし主人の徳川慶福が将軍となったなら「紀州藩から独立し、大名となって江戸城内で政治を行なう」ことなども夢ではありません。過去に3度、そういうことがありました。



(紀州 徳川慶福)

12代将軍 徳川家慶の妻は忠央の妹

水野忠央は、歴代の新宮の殿様の中では抜群の政治力を持っていました。水野忠央が紀州藩の殿様以上の力を持てたのは、この時の紀州藩主 徳川慶福は、あまりにも幼いということもありました。また、当時、紀州藩で一番力を持っていた元藩主の徳川治宝が死に、その下で紀州藩のためにがんばっていた実力者伊達宗広らを追い出したことも力を持った理由の1つでした。

* 伊達宗広は、外務大臣 陸奥宗光の父

伊達宗広の子は、紀州藩のこの扱いに不満を持ち、紀州藩を抜け出しました。そして、神戸に行き、坂本龍馬と出会い、海援隊で大いに活躍します。明治になって「カミソリ大臣」と呼ばれました。そうです。伊達宗広の子とは、外務大臣となった陸奥宗光でした。



(陸奥宗光)

忠央は、南紀派のリーダー彦根藩主 井伊直弼と組み、朝廷側や幕府内部に食い込んでいき、また、忠央の妹は、12代将軍 徳川家慶の妻となって大奥の根回しを行ないました。井伊直弼は幕府の実質トップの大老となり、ついに紀州藩主 徳川慶福は、将軍の跡継ぎとなりました。反対派の者は次々と牢屋に入れられました。これが有名な「安政の大獄」です。反対派の吉田松陰から、「水野（忠央）は悪い者だが頭がいい。世間はとても怖がっている。」と言われていました。目的のためなら手段を選ばず自己の方針を貫いた人でした。

木本は大騒動

領地替えの対象となった木本、北山、入鹿、本宮の奥熊野4組27ヵ村でお触書が出されると、木本の極楽寺を中心に村人たちが「一揆だ!」ということで大騒動になりました。



(昔の極楽寺)

(騒動の原因2)

「重税に対する村人の不安」と「徳川領民であることのプライド」

新宮領内にある熊野川原の役所は、毎日、渡船場でぞうり、草鞋、野菜の販売に至るまで容赦なく10分の1の税を取り上げました。これは和歌山本藩内では例のないことでした。和歌山本藩は四公六民に対し、新宮藩は六公四民ととても重い税が課せられていました。

奥熊野4組27ヵ村の村人は、紀州藩の殿様の支配から離れることを喜びませんでした。そこには、身分、階級制度がはっきりしたこの時代、和歌山本藩領の「表領民」、支藩である新宮藩、田辺藩領の「裏領民」という精神的身分差別があったのでしょう。また、木本の人たちにとっては、奥熊野の中心地として発展してきたとの意識があったのでしょう。

3 騒動をしずめた吉田庄太夫

思いがけない抵抗に驚いた水野忠央は、さっそく、元代官を送り、木本、北山、入鹿、本宮の奥熊野4組の村人たちをなだめようとした。しかし、通用しません。そこで、忠央は、紀州藩江戸詰勘定組頭吉田庄太夫に領地替えを命令しました。庄太夫は密かに木本のリーダーの3人を江戸に呼び寄せました。



(吉田庄太夫)

領地替えはしないと約束

まじめな性格の吉田庄太夫は、事前の調査を細かくていねいにおこないました。自分の宿に村人を招き、親しくていねいに話を聞きました。1857年(安政4年)5月のある日、庄太夫が木本の西川町にある「いせ屋」の隠居に来て、村人たちの代表と会い、「領地替えはしない。このことは責任をもって引き受ける」と約束しました。紀州藩の命令というよりも水野忠央に背いての判断でした。これにて4年にわたる大騒動は終わったのでした。



(騒動解決の地「いせ屋」の隠居)

4 騒動の後

1858年（安政5年）、13歳の紀州藩主 徳川慶福が14代将軍と決まり、徳川家茂を名乗りました。水野忠央は夢の一つを実現しました。「紀州藩から独立し、大名となって江戸城内で政治を行なう」というもう一つの夢の実現まであと一歩です。しかし、忠央は、味方であった大老の井伊直弼にも警戒されていました。

忠央は新宮で隠居

1860年（万延元年）3月、南紀派で大老の井伊直弼が江戸城桜田門外で暗殺されてしまいました。直弼を手助けした水野忠央は、「安政の大獄」の罪を問われてしまいました。慶福を14代将軍にした最大の功労者忠央は江戸を追われ、紀州新宮で隠居の身となりました。



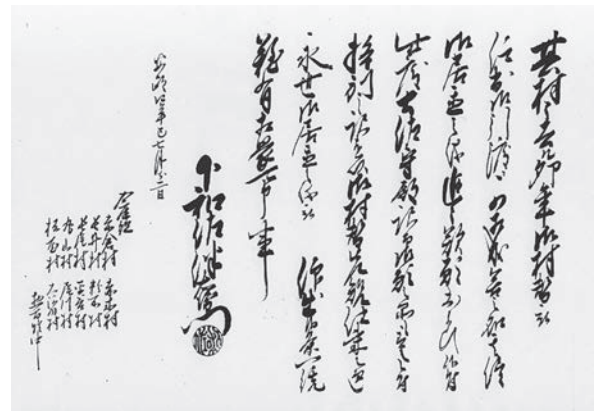
(水野忠央)

吉田大明神

1860年（万延元年）、江戸の紀州藩邸において吉田庄太夫は、忠央が出した命令に背いた責任をとり、腹を切って死にました。庄太夫の死は、木本、北山、入鹿、本宮の人たちにとって大きな悲しみでした。庄太夫は村しずめの神「吉田大明神」としてそれぞれの村に祀られました。木本神社では、毎年6月に吉田大明神祭が盛大に行われています。



(吉田大明神祭)



(村替据置を示した文書) 紀和町赤木区蔵

ただもと 水野忠幹 ～ 10代新宮城主～

水野忠幹は、水野忠央の長男として生まれました。井伊直弼が暗殺された桜田門外の変の後の1860年（万延元年）父忠央が隠居謹慎の身となってしまいます。この翌日に忠幹は、水野家を継ぎ、紀州藩主徳川茂承をそばで助けることになりました。忠幹は、真面目な性格につけ活発で心も広く、周囲から信頼されました。



(水野忠幹)

第二次長州征伐 忠幹率いる新宮水野隊の奮戦

幕末の紀州藩は、外国船に対する防備の費用がかかり、財政は大変苦しい状況にありました。しかし、徳川御三家でしかも14代将軍徳川家茂を出した紀州藩は、幕府と対立する長州に、二度も軍を送らなければなりません。

1864年（元治元年）蛤御門での長州藩の藩兵による兵乱で、京都は大火となってしまいました（禁門の変）。長州藩は朝敵（朝廷の敵）となり、幕府は朝廷の命令を受けて長州征伐を宣言します。第一次長州征伐は、長州藩が負けを認めたため、幕府軍は戦わないまま撤退しましたが、間もなく長州藩は、倒幕へと考えを転換したため、幕府は再び長州征伐を宣言します。薩摩藩は、それまで敵対していた長州藩を支持します。朝廷は出兵を反対、多くの藩が出兵を拒否する中、紀州藩は出兵せざるを得ませんでした。紀州藩主 徳川茂承は、幕府軍先鋒総督を任されます。しかし、法螺貝を吹き、陣太鼓を叩き攻撃する旧式の幕府軍は、結成して間もない長州の奇兵隊の攻撃に合い、みじめな負け方をしてしまいます。

唯一奮戦したのが、忠幹率いる水野隊でした。芸州口（広島県廿日市市）で長州軍を迎え撃ちました。隊長の忠幹自らが銃を持って戦い、水野隊は戦死者を12人も出しながらも、長州を三度にわたって負かしてしまいました。長州兵は、この忠幹を「鬼水野」と恐れしました。この奮戦を称える碑が新宮にあります。



(丙寅戦死者の碑) 新宮市・南谷墓地

最初で最後の「新宮藩主」そして「新宮藩知藩事」に

明治の時代となった1868年（明治元年）、新政府から達しが出て、新宮水野家は念願の独立大名となりました。新宮領は、紀州藩から独立し、「新宮藩」が誕生しました。しかし、翌年、新宮藩主 水野忠幹は、新宮藩領を朝廷に還納し、新宮藩知藩事となります。版籍奉還です。1871年（明治4年）新宮藩が廃されて新宮県が置かれました。廃藩置県の実施で、忠幹は知藩事の職を解かれ、後に男爵となりました。